歴史地理学　48－1（227）35～44　2006. 1

# 学校・博物館を取り込んだ地域連携による景観の活用について
## ― 信濃川中流域における火焔型土器出土の縄文遺跡に関した連携から ―

藤岡達也・戸田　智・石田浩久

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．信濃川中流域の火焔型土器と当時の地域交流について
Ⅲ．本地域における自然条件及び社会背景
Ⅳ．学校教育の中での縄文時代の取扱いの課題
Ⅴ．地域における博物館と学校の連携の意義
Ⅵ．まとめと今後の課題

### Ⅰ．はじめに

新潟県信濃川流域には縄文時代で唯一国宝に指定された土器を出土した笹山遺跡[1]をはじめ，多くの著名な縄文遺跡が存在する。この地域の縄文遺跡から出土する遺物には火焔型土器を伴うこともあり，中越地域に限られた火焔型土器の特徴的な分布から当時の独自な文化圏すら考えられている（例えば，小林など[2]）。火焔型土器については，急激な消滅など不明な点も残されており，火焔型土器文化の形成に至った河川流域の交流，他地域への伝播や影響など，考古地理学的なアプローチが望まれる課題も多い。

ところで，現在の地方における過疎化・高齢化の進む地域の課題の解決のためには，様々な取組みが考えられ，地域連携の意義も大きくなる。その中で，本研究で注目したいのは上述の「縄文中期の火焔型土器」を共通の文化遺産として現在の地域連携や地域活性化に活かす試みである。

2002（平成14）年度に新潟県信濃川上～中流域に位置する長岡市・三島町（現長岡市）・十日町市・中里村（現十日町市）・津南町の２市２町１村（現２市１町）は，「火焔型土器」，「縄文」をキーワードにした広域的な体験学習交流や観光事業を進める目的で，「信濃川火焔街道連携協議会」を発足させた[3]。2003（平成15）年度より，上述の「連携協議会」をもとに協議会参加市町の博物館・学芸員と学校・教員を主とした「信濃川火焔街道博学連携プロジェクト」が組織され，地域や大学を巻き込んでの教育活動が展開され始めた。このプロジェクトにより，縄文という地域の文化遺産を活用した学校教育への貢献が期待できる。

本稿で取り上げる地域の一つである津南町は県の最南端に位置し，ここでは信濃川と支流河川によって形成された町の特徴である約10,000haに及ぶ河岸段丘に対して，1968（昭和43）年から国営総合農用地開発事業地区調査が始められ，現在にいたっている。当町では過疎化が進み，農家経営の後継者問題が浮上したことからも，大規模農業を導入し，継続的な圃場整備事業を進めている現状にもある。また，その事業の推進の中で，新たな縄文遺跡が発見され，発掘されるという循環が繰り返されている[4]。

さらに，上述した社会・経済的な地域の課題以外にも，自然に関する課題も有してい

キーワード：縄文土器，信濃川，新潟県，博学連携

る。当地域は豪雪地帯に属し，これが冬季の住民の生活や地域の文化に大きく関わっているのは事実である。しかし，豪雪のように例年，季節によって予想される課題と異なり，新たな自然に関する課題が地域共通の問題として浮上したのが，2004(平成16)年に生じた「中越地震」という自然災害であった。中越地震では，この地域及び「信濃川火焔街道博学連携プロジェクト」にも大きな影響を与えた。本稿では，このプロジェクトの設立意義及び予期しない自然災害との関係についても触れ，地震という潜在的な地域の課題が現われたとき，どのような地域としての取組みや対応がなされたのかも合わせて，検討・考察したい。

以上，本稿では，信濃川中流域での縄文という歴史遺産をテーマにした社会教育や学校教育における地域の教育活動に焦点を当て，現在の学校教育や地域の課題を踏まえながら，市民が地域の景観に着目し，それらの自然景観や歴史景観等を活用し，地域の活性化に繋げるための取組内容や方法等を検討したい。近年，様々なところで，行政主体の「街づくり」への市民の参画が見られる。本報告では，その中でも特に子どもたちに対する地域の総合的な教育力に注目する。すなわち，学校と博物館，一般行政や地域との連携，パートナーシップの構築についても津南町や関連した協議会の動向から展望する。

## Ⅱ．信濃川中流域の火焔型土器と当時の地域交流について

冒頭にも述べたように，信濃川中流域には縄文時代中期の代表的な火焔型土器を伴う遺跡が分布している。図１は，新潟県における火焔型土器を出土した遺跡の分布を示したものである。

この土器は四つの大型突起に火焔を連想して名付けられたものであり，鶏頭冠と呼ばれる突起と鋸歯状の口縁に特徴がある[5]。火焔土器は馬高遺跡出土のみのものを指し，それ以外の土器を火焔型土器と呼ばれることもある[6]が，本稿では，特にこれらの区別をつけず，火焔型土器と称する。また，火焔型土器と同じ文様ではあるが，鶏頭冠の代わりに短冊状突起をもち，鋸歯状口縁でなく，波状口縁をもつものを王冠型土器と呼んで火焔型土器と区別されることもある[7]が，本稿では同じ扱いとする。

近年，縄文時代の遺跡や遺物に注目されることが多くなっているが，現在のところ，国内において，縄文土器が国宝に指定されているのは，一群の遺物をともなう十日町市笹山遺跡出土の火焔型土器のみである。当然ながら，考古学の分野において，これまでも火焔型土器に関する研究の蓄積は地元の新潟県をはじめとして膨大なものがある。しかし，本稿では，火焔型土器そのものよりも遺跡や他の遺物を含めての考察によって，当時の自然地理や人文地理と地誌を明らかにすることが，現在の地域交流の在り方を縄文時代の地域交流から捉えていくことを可能とし，地域の独自性を明確にすることにつながると考えていく。つまり，小野の述べる考古地理学の手法[8]により，成果を現在の地域活性化や教育活動につなげることを期待しているのである。そこで，ここでは，火焔型土器について考古地理学の観点とも関連する内容のみを概観する。

火焔型土器は，新潟県の信濃川中流域周辺のみに発達したものであるが，周辺地域の縄文土器から影響を受けたり，与えたりするなど当時の様々な地域との交流も考えられる。火焔型土器の成立時期には，北陸の土器の影響が読み取れ，さらに東北地方の大木式土器との干渉によっても火焔型土器が形成されたと指摘されることもある[9]。火焔型土器に類似した土器は東北や関東でも一部類似したものが報告されており，これらとの関係も検討課題になっている。例えば，会津地方にも火

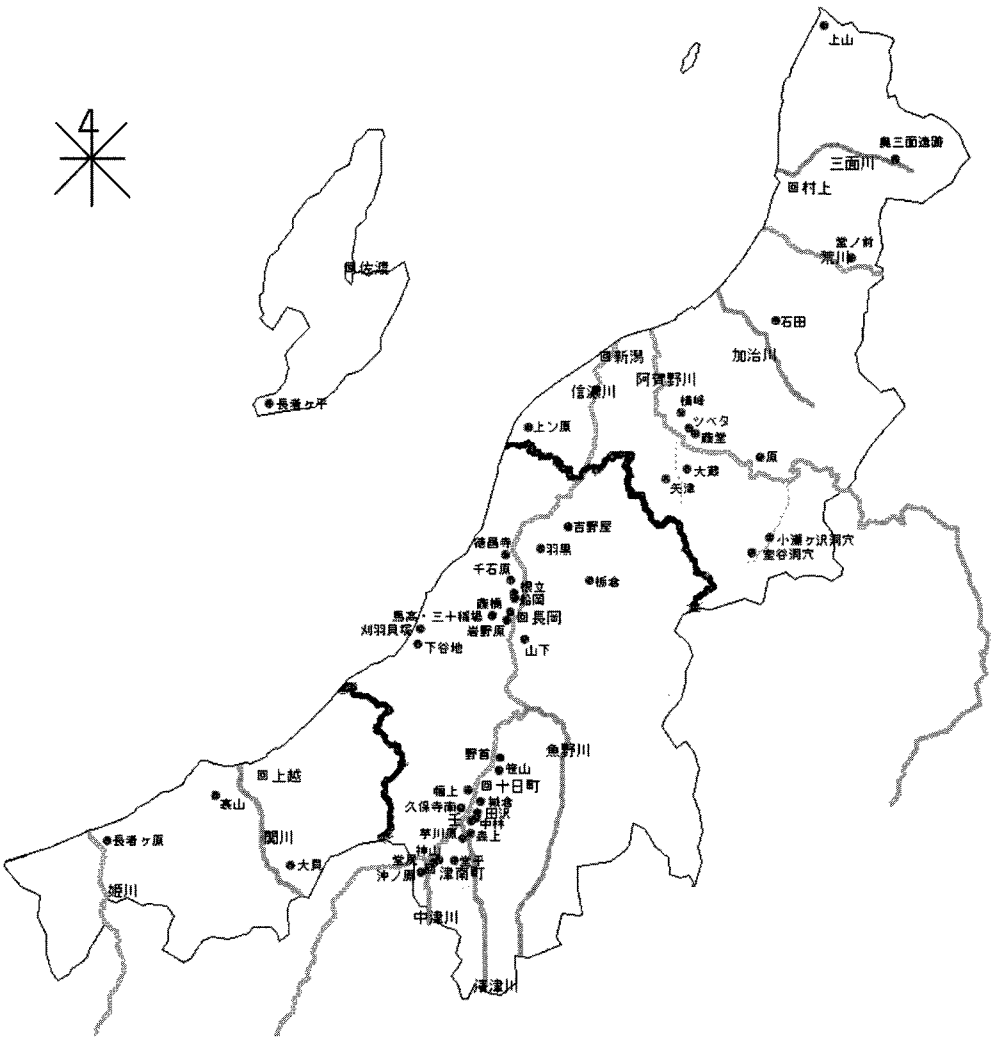


**図1**　新潟県における火焔型土器出土遺跡

注5）の文献による

焔型土器が見られるが，これは，逆に阿賀野川流域を下って，信濃川流域に影響を与えたという考え方もある[10]。佐渡市や富山県からも火焔型土器の発見があるが，これらは，中越地域の火焔型土器が伝播したか，模倣したかと考えられているのが一般的である[11]。

火焔型土器は新潟県内でも古い時代と新しい時代によって分布範囲が異なっていることは従来から指摘されている。また，火焔型土器は縄文中期の終わりには見られなくなり，東北地方で発達した大木式土器がこの地域で見られるようになる。この火焔型土器が発展した地域は縄文後期に入るとそのまま三十稲葉式土器が広がる地域となる[12]。

さらに，火焔型土器を出土する十日町市・津南町の遺跡からは糸魚川市周辺の生産遺跡からの起源と考えられるヒスイ製品や蛇紋岩製の磨製石斧が多く出土しており，同じ新潟県内でもこの地域に特に集中している。逆に糸魚川市内の縄文遺跡からは，火焔型土器やその特色を持った土器が多量に出土しており，これらのことから縄文時代の現十日町

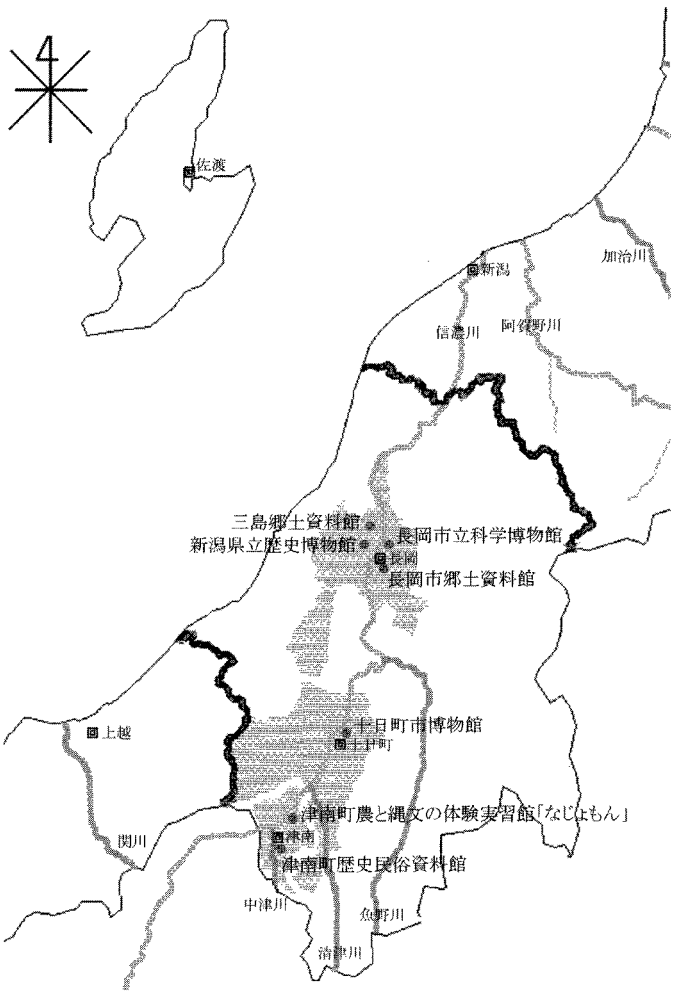


**図2**　信濃川火焔街道連携協議会に参加する市町の範囲と関連する博物館

市・津南町地域と現糸魚川市地域との交流が推定されることもある[13]。いわば新潟県だけでなく，国内でも代表的と言える縄文時代の遺物によって，二つの地域の交流が強かったことが推定できるのは興味深い。

## Ⅲ．本地域における自然条件及び社会背景

ここで，長岡市，十日町市，津南町の連携の意義について焦点を当てたい。図2は，「信濃川火焔街道連携協議会」に参加する二つの市と一つの町，及び関連する博物館等社会教育施設の存在及び立地状況を示したものである。特にここでは，その中でももっとも人口が少なく，多くの地域の代表的な問題が顕著になっている津南町に着目する。津南町は，県の最南端に位置し，長野県に隣接している豪雪地帯である。

博学連携プロジェクトに参加している2市1町の中でも長岡市は火焔型土器第一号が発見された馬高遺跡が存在する。また，十日町市は上述したように国内で唯一，縄文時代の国宝の指定を受けた土器を含む一連の遺物を出土した笹山遺跡がある。一方，津南町は沖の原遺跡のように火焔型土器は出土するものの，全国的な知名度から考えると，印象は弱い。これは長岡市の人口が191,481人，十日

町市が63,558人と比べると，津南町は12,063人と少ない[14]ことから見てやむを得ない点もある。

ところで，従来から，津南町を含んだこの「信濃川火焔街道」が含まれる地域は信濃川地震帯とも言われ，北米プレートとユーラシアプレートとの境界であることから将来の地震活動が警告されていたこと[15]も無視できない。実際，津南町は，2004(平成16)年「中越地震」での大きな被害地の一つであり，自然景観からも新しい地殻変動が推定される。例えば，津南町の中で，信濃川右岸に発達し，主に支流の中津川と清津川によって形成された複数の河岸段丘は十日町断層や津南町断層の影響を受けている。これらの河岸段丘が従来から研究されており[16]，近年でも段丘形成に関わる活褶曲と活断層の関係や構造運動が論じられている[17]。

その一方で，これらの河岸段丘は，日本最大規模のものとして捉えられ，津南町の特色として広報活動にも利用されている。図3は，この河岸段丘のビューポイントとしてのマウンテンパークから撮影したものである。

この約10,000haに及ぶ河岸段丘に対しては，1968(昭和43)年から国営総合農用地開発事業地区調査が始められた。1972(昭和47)年に基本計画が決定されてからも，何度かの事業変更後，現在の事業にいたっている[18]。一方，地域の過疎化は進み，農家経営の後継者問題が浮上したことからも，大規模農業を導入し，継続的な圃場整備事業が進められている背景もある[19]。

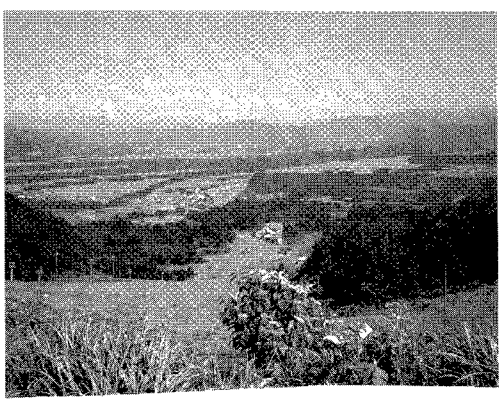

図3　津南町の河岸段丘

さらに，縄文時代の遺跡の発見が過去だけでなく，圃場整備事業に伴う発掘調査から，新たな縄文遺跡が毎年発見されつつあることが町の特色として挙げられる。つまり，遺跡の保存の問題を抱えながらも，これらを活用し，事業の開発とともに，町の活性化に繋げる試みが見られていると言える。

津南町には，以前より津南町教育委員会が管理する歴史民俗資料館が存在し，ここには，国指定の民俗資料とともに津南町の縄文遺跡から出土された遺物も展示されている。しかし，2004(平成16)年8月には，別の場所に新たな「農と縄文の体験実習館」が開館し，ここでは，津南町の縄文遺物の収集や展示だけでなく，児童を対象とした土器づくりなどの体験活動を重視したプログラムが準備されている。館の敷地内には，復原された縄文住居も展示され，内部に入ることもできる。体験実習館の活動には実習館の職員や町職員だけでなく，NPOや地域の有識者が講師を務めている。また，地元の有志が博物館の展示に関連した作品を販売しているのも特徴である。

地域の文化遺産を継承するためには，次世代に伝えていく必要がある。博物館の建設は，それらの資料収集，展示施設として，言わばハード面としては，大きな意義があるのは改めて述べるまでもない。しかし，それらをシステム的に学校教育や児童への教育展開としての言わばソフト面としての機能を有するのは決して容易ではない。また，博物館のみでの活動に限度があるのも事実である。そこで，博物館としても，学校など，その外部の団体や人材との連携も重要な意味が考えられる。

## Ⅳ. 学校教育の中での縄文時代の取り扱いの課題

次に，考古学的遺産の取り扱いに関わる学校教育側からの課題を検討したい。2002(平成14)年度から，現学習指導要領が本格的に実施されており，「総合的な学習の時間」の一環として，多くの学校が地域を素材とした授業を展開している。しかし，一方，教科面では，学習指導要領において，内容的に大幅な削減があったのも事実である。特に，縄文時代は小学校の社会科の指導内容から削除された。日本において大都市は沖積平野に立地し，地域によっては縄文になじみがないこと，科学技術の発達や社会の発展に伴う教育内容増加による学習者の負担など，様々な原因を挙げることが考えられる。教育課程に応じて小学校の教育内容から縄文時代の取り扱いを削減することは，本地域のように縄文遺跡の豊富な地域にとっては惜しいことである。逆に地域の特色を考え，教育素材として取り扱うには大きな意義があると言えるだろう。

近年，日本の学校教育の中でも「考古学教育」の実践例が報告されつつある[20]。「総合的な学習の時間」の中でも遺物・遺跡などの考古学の素材を取り扱う教科横断・総合的な学習は，多様な教育活動の展開が期待され，重要な意味を持つ[21]。従来，歴史教育の側面からの取組が多かった考古学の内容を単に文科系・理科系を融合した教育素材として，捉えるだけでなく，体験学習や問題解決型の学習を行う上でも効果的な教育方法を考えることができる。

ところが，一方で，学校教育では「総合的な学習の時間」の在り方そのものが論議されている。従来の知識重視型の教育に比べ，児童・生徒の体験学習や問題解決型学習を重視し，「生きる力」の育成をめざした教育活動をねらいとしているため，これからの教育として評価されている点もある。しかし，現学習指導要領に対しては，「学力低下」の問題が指摘されることも多い。藤岡[22]は，地域を主題とした「総合的な学習の時間」として，歴史地理学的なアプローチは地域教材の開発や教育プログラムの展開に意義のあることを大阪府河内平野の水害・治水史を例に論じた。本稿では津南町における，このような教育活動の意義についても検討する必要がある。さらに，本地域に限らず，特定の時代の遺跡や歴史遺産を有する地域の特色を考えた場合，全国画一的な学習指導要領や教科書で教科教育を行うことには限度があることを指摘したい。そのため，学校や地域の特色に応じた教育活動は重要でありながらも，教科教育よりもむしろ「総合的な学習の時間」の活動に意味があることも考えられる。

加えて，2003(平成15)年12月の学習指導要領一部改正により，「総合的な学習の時間」関連部分に，「学校図書館の活用，他学校との連携，公民館，図書館，博物館等の社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携，地域教材が学習環境の積極的な活用などについて工夫すること」[23]とされ，学校のみではなく地域を活用した教育が求められている。一般に児童・生徒が，興味・関心・意欲を持ちつつ，基礎知識の定着を図り，「自ら学び，自ら考える」学習を展開することは学校や教員としても決して楽なことではない。その中で，本報告で紹介する「信濃川火焔街道博学連携プロジェクト」の実践は「総合的な学習の時間」の実施にあたっての一つの意義のある例として挙げることができる。それだけにとどまらず，行政サイドから進められていた本協議会の事業が，学校や博物館のいわば「現場」からの推進になっていることにも評価をすることができる。つまり，トップダウン的な地域の活性化をめざすのではなく，ボトムアップによる地域の活性化を期待するのである。

地方にとっても，現在，市町村合併が進みつつあり，本地域においても，2005(平成17)年4月から，いくつかの町村が長岡市や十日町市などの従来の都市と合併された。このように市町村との境界は行政等によって変わっていくことが多い。しかし，共通した文化遺産による地域のアイデンティティが，このようなプロジェクトの中で明確になることにも意義が認められる。

## V．地域における博物館と学校の連携の意義

はじめに紹介したように，2002(平成14)年に，信濃川中流域に位置する長岡市・三島町（現長岡市）・十日町市・中里村（現十日町市）・津南町の2市2町1村(現2市1町)が，「火焔型土器」，「縄文」を共通の取組みのテーマとして各市町村にとどまらない広域的な体験学習交流や観光事業を進める目的で，各市長が交代でその代表を務める「信濃川火焔街道連携協議会」を発足させた[24]。

これをもとに，その1年後，協議会参加市町村の博物館・学芸員と学校・教員を主とした博学連携ネットワーク「信濃川火焔街道博学連携プロジェクト」が組織され，考古学的な内容を取り入れた教育活動の展開が図られ始めた。このプロジェクトでは，津南町を含む信濃川流域の縄文遺跡や遺物を共通の地域の学習資源として認識し，複数の博物館と多数の小学校が連携した「総合的な学習の時間」による教育活動が毎年実施されている。同時に，ホームページなどでの情報公開を通じて，全国的にも活動を発信している。

ここでは特に，この「信濃川火焔街道博学連携プロジェクト」の活動内容やその意義を紹介する。特筆すべきことは，2004(平成16)年10月23日に生じた中越地震直後にもあえて，博学連携プロジェクトの一環とする「2004年縄文子どもフォーラム」が年間計画どおり実施されたことである。2004(平成16)年度の1年間の継続的な活動を概観するとともに，震災地に果たしたこのフォーラムの役割についても触れてみたい。

2004(平成16)年度の博学連携プロジェクトに参加した小学校において，縄文学習を含んだ「総合的な学習の時間」は1年間の年間プログラムを通じて継続的に取り組まれた。4月から各学校担当の地元の博物館の学芸員が出前授業等を行ったり，学校近くで発掘調査があった場合，子ども達を現地へ案内したりする。7月には複数の学校が合同で博物館や遺跡見学を含んだ交流学習会を行ない，それぞれの学校の児童が自分達の取組みを紹介し合う。同時に学芸員や他校の教員からもアドバイスを受けた。

11月には，津南町公民館及びその夏に開館されたばかりの津南町「農と縄文の体験実習館」において，火焔街道博学連携プロジェクトの一環として「縄文子どもフォーラム2004」が開催された。このフォーラムでは，まず，午前中に津南町の公民館で各学校の代表者によるパネルディスカッションが行われた。パネラーが縄文を学ぶことで得た自分の思いや考えを発表するだけでなく，会場の他の学校の小学生からも質問，意見が寄せられた。それに対して逐次学芸員から回答や説明が寄せられ，フォーラムの最後には地元の教育大学の教員と県立博物館館長からコメントが示された。午後からは「農と縄文の体験実習館」でポスターセッションが実施された(図4)。ここでは，子ども達が「総合的な学習の時間」で取り組んだ縄文時代に関する体験活動や問題解決型学習の成果を発表し合った。さらに学芸員の指導のもと，展示施設や復原住居を見学し，また復原した石器を用いて体験活動を行った。

2年目の2004年度の一連のイベントにおいて，上述の11月のフォーラムは当初7校の小学校が参加する予定であったが，10月に生じた「中越地震」のため3校だけの参加となった。大きな地震被害地でもある本地域では，

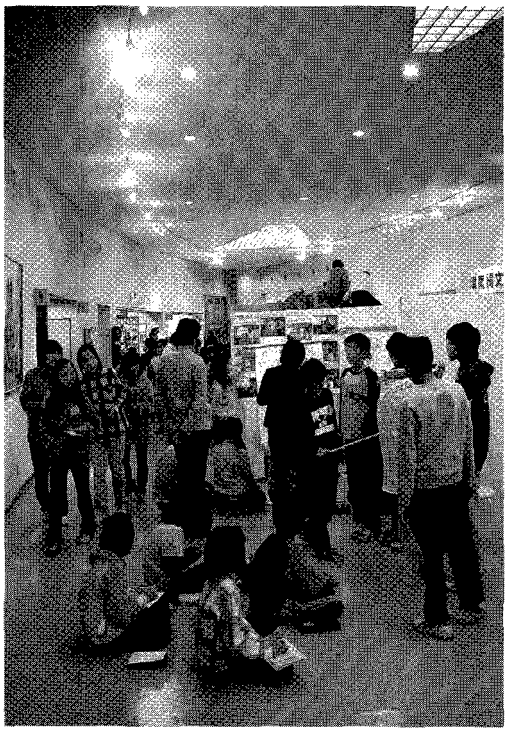

図4　博物館でのポスターセッション

当然ながら開催そのものが窮地に陥った。しかし，これまで取り組んできた児童の熱意により教員や学校は動かされ，これらのイベントでは，子ども達でなく，むしろ大人が励まされたとの報告もされている[25]。

12月以降は，子ども達の研究成果や作品展示を中心とした「子ども縄文研究展」が3つの地域の博物館で順番に開催され，1年間の小学生の学習成果が公開された。

3年目を迎えた2005年度，上述の「信濃川火焔街道博学連携プロジェクト」は，参加する小学校数や教員・大学生・大学院生数の増加など教育活動が一層拡大している。このプロジェクトでは，学校側から博物館へ協力を求めているだけでなく，博物館側からの学校への積極的な役割も見られる。行政・博物館・小学校・大学等複数の機関が，情報の共有化，役割分担，対等な立場のもと，いわば「パートナーシップ」を構築し，「縄文」をキーワードに地域の活性化に貢献していると言える。現在，市町村合併が進みつつあり，本地域も，2つの町村が長岡市や十日町市などの都市と合併された。市町を越えた地域全体の独自性を，このようなプロジェクトの中で児童が意識することにも意義がある。

## Ⅵ. まとめと今後の課題

本稿では「火焔型土器」や「縄文遺跡」を共通の文化遺産とする信濃川中流地域における2市1町の取組みを「博学連携プロジェクト」を中心に教育活動と地域活性化の意義から紹介した。縄文時代における物資や文化交流等の復原については，考古地理学的なアプローチが必要である。現在の地域交流においても，単なる過去の遺跡・遺物の存在による歴史景観復原の活用だけでなく，過去の交流やかつての同一文化圏を意識することによって地域の連携を図り，同じ課題に取り組むという，考古地理学的な視点を現在に活かす意義があると言える。

本稿では，信濃川中流域を中心とした中越地域に焦点を当てた。しかし，過疎化・高齢化などの地域の課題，「生きる力の育成」が求められながらも学力低下が懸念される学校教育の問題，これらの解決方法が求められているのは，今日における国内全体の課題でもある。本稿で紹介したようなプロジェクトへの取組は縄文中期の遺跡間の交流を現代に再現する「歴史地理学」的な側面をもったアプローチとして，上の課題解決に無関係ではない。このような地域の遺産や連携に関する交流の意識の啓発は小学生段階から意味があるものと指摘できる。

近年，現学習指導要領の課題に見られるように縄文だけでなく，考古学・歴史学的な遺産が，学校教育に十分取り入れられているとは言い難い状況である。国内には，様々な考古学・歴史学的な遺跡・遺物が見られ，これらの学校教育への活用の意義は改めて述べるまでもないが，その方法やシステムの構築は

現在模索中にある。今回，紹介した「火焔街道博学連携プロジェクト」にはその先験的な取組みとも言える。

ただ，この中でも学習者は小学生ということもあって，火焔型土器の地域的な魅力の紹介にとどまっており，縄文時代の象徴という取り上げられ方しかされていないという課題も残る。縄文という時代の時間軸だけでなく，当時の交流という空間軸も小学生だけでなく住民にも意識される必要があるだろう。火焔型土器のように地域に特有な文化遺産に住民が関わっていくには，どのような取組みが効果的かも今後の課題である。

現在，津南町を中心として，自然，歴史景観を活用した様々な取組が試みられている。しかし，従来は，行政主体であった地域の活性化が，市民にとって身近で具体的な学校や博物館を通して，地域の活性化を図るのは必ずしも容易ではない。歴史的遺産を重視し，「火焔街道博学連携プロジェクト」が，より発展的な内容を加えながら，今後も継続的に活動できるためには，地域のパートナーシップの構築が不可欠である。特に，複数の博物館，複数の学校の連携による「博学」連携に一般行政や地元の大学，NPOはどう加わっていくのかが今後の課題とも言える。

繰り返して述べるが，地域の過疎化・高齢化の問題，子ども達の学力低下や知離れの問題，これらの解決方法が求められているのは，今日的な日本全体の課題である。次世代の教育活動に「歴史地理学」的なアプローチを取り入れていくことはこれらの解決に決して無関係ではないことを強調しておく。

（上越教育大学）

〔付記〕

本研究を進めるにあたって，津南町教育委員会生涯学習課佐藤雅一氏には様々な御教示と資料の提供をいただいた。また，十日町市下条小学校教諭金子和宏氏，新潟県立歴史博物館主任研究員山本哲也氏にはいろいろと御教示をいただいた。

紙面をお借りして深謝いたします。

〔注〕

1) 十日町市博物館『笹山遺跡 ― 国宝指定笹山遺跡出土品のすべて ―』，十日町市博物館，1999，4～14頁。
2) 小林達雄『縄文土器の研究』，学生社，2002。
3) 信濃川火焔街道連携協議会『フォーラム火焔街道往来2004』，2004，1～16頁。
4) 津南町教育委員会『平成10年度津南町遺跡発掘調査概要報告書』，1-44，1998。
5) 十日町市博物館「火焔型土器の基礎知識」，『縄文の美 ― 火焔土器の系譜 ―』56～59頁，1996。
6) 前掲２)。
7) 今福利恵「火焔土器の系譜」十日町市博物館『縄文の美 ― 火焔土器の系譜 ―』52～55頁，1996。
8) 小野忠熙『日本考古地理学研究』，大明堂，1986。
9) 前掲２)。
10) 佐藤光義・長尾修『石生前遺跡発掘調査報告書　福島県河沼郡柳津町文化財報告書第１集』，1991。
11) 前掲２)。
12) 前掲２)。
13) 木島勉「火焔のクニと翡翠のクニ ― 妻有地方と西頸城海岸部の交流 ―」，十日町市博物館『火焔型土器をめぐる諸問題 ― 笹山遺跡の謎に迫る ―』，16～19頁，2000。
14) ２市と１町の人口はそれぞれ，長岡市，十日町市，津南町のWebページによる。
15) 信濃川ネオテクトニクス団体研究グループ「信濃川津南地域における第四紀後期の段丘形成と構造運動」，第四紀研究41-3，199～212頁，2002。
16) 例えば，信濃川段丘グループ「新潟県津南地域の第四系」，新潟大学教育学部高田分校紀要13，175～203頁，1968や渡辺秀男「新潟県十日町盆地の津南段丘群の形成について」，地球科学54，310～327頁，2003。
17) 例えば，田中真弓「信濃川中流域，十日町盆地における河成段丘の変位からみた活褶

曲と活断層の関係」，第四紀研究39-5，411-426，2000や前掲15）など）。
18）津南町教育委員会『津南町遺跡発掘調査概要報告書』，1～44頁，1998。
19）津南町教育委員会『町内遺跡確認試掘調査報告書（2）』，1～82頁，2003。
20）例えば，群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団『地域教材開発研究・研修報告書』，1～34頁，2001　など。
21）藤岡達也「理科教育と考古学的な内容との関連性について ― 地学教材としての活用及び総合・学際的な教材開発・実践展開の観点から ―」，理科教育学研究44-2，1～10頁，2004。
22）藤岡達也「大阪府河内平野における水害・治水史の考察 ― 大東水害にみる古地形，土地利用変化の影響の検討から ―」，歴史地理学42-1，16～28頁，2000。
23）文部科学省『小学校学習指導要領（平成10年12月告示平成15年12月一部改正）』，2003。
24）前掲３）。
25）山本哲也・金子和宏「『縄文』をキーワードに博学連携プロジェクト」，Journal Musee，26～27頁，2005。

Practical Use of Regional Sceneries taking in Partnership between Schools and Museums: From the Viewpoint of the Applications of Ruins on Jomon Period around the Shinanogawa River

FUJIOKA Tatsuya, TODA Satoshi, ISHIDA Hirohisa

Since 2002, Nagaoka City, Tookamachi City and Tunan City around Shinanogawa River in Niigata Prefecture have founded Conference of Partnership for the purpose of development of sightseeing and advanced activities of these cities. After that the Project of Partnership Program of School and Museums has started for the mutual exchanges. In this Project, We can see the contributions to the country area through the advanced activities of common treasure of Jomon Period.

There are many famous ruins of Jomon Period surrounding Shinanogawa River in Niigata Prefecture. Especially Sasayama Ruins produced Jomon Earthenwares which were selected as national treasures. The Earthenwares were called Fire type for the feature of the shape. And the region of the Fire type Earthenwares are very restricted, so the special cultural sphere is pointed out.

But some problems still remain, such as the reason of the extinction and the influence to other region of these types of Earthenwares or so. For the solution of these problems the method of archeology and geography are both required.

For the solutions of problems of the country area, many attempts are made, and the partnership with many cities are more required.

In this paper, We discussed the importance of this project which develops the use of the Earthenwares in Middle Jomon Period as the common treasure.

**Key words:** Earthenwares of Jomon Period, Shinanogawa River, Niigata Prefecture, Partnership between schools and museums